

観光の形而上学

——コロナ禍で考える観光の本質——

西 村 弘

はじめに

- I 『易経』由来の「観光」論議
 - II ジョン・アーリ『観光のまなざし』登場の意味
 - III 東浩紀の「観光客」論
 - IV 観光とは何か——観光の本質観取——
 - 1. 観光の本質観取の視点
 - 2. 楽しみのための旅行
 - 3. 観光の非日常性の特徴
 - 4. 観光の意味の反転・拡張
- おわりに

はじめに

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、世界から観光客が消えた。往来は自粛を余儀なくされ、入国は拒否、都市は封鎖された。観光は「不要不急」どころか「感染拡大の怖れがある行為」となった。インバウンド観光客が急増してきた日本では、その落差はことのほか大きく感じられた。

しかし、これもやがては収束する（終息は定かならずとも）。ワクチン接種が進むとともに観光客を受け入れる動きがあり、反動からより強い観光欲求があるとも言われる。アフターコロナの観光はどうなるのか、ウィズコロナ時代の試行錯誤（バーチャル観光やオンラインツアーなど）は続くのか、はたまた単に以前に戻るだけなのか……。それだけは勘弁というのがオーバーツーリズムに苦しんだ観光地の思いであろう。コロナ禍の時間は、いまいちど観光を見直し、対策を考える奇貨とすべきだ。

検討は観光研究者や関係者がすでに進めており、より安心で安全な観光客の受け入れ方や、リピーターを増やす体験型観光、興味を深めるガイドツアーなどが提案されている。しかし、具体策を論ずるとともに、そもそも観光とは何かもあらためて問う必要があるのではないだろうか。そうした考察が不十分だったから、思いがけぬ観光客急増に戸惑い、「観光公害」を引き起こしたのではなかったか。

観光学の著書には、前段に必ず「観光とはなにか」についてのなにかの説明がある。しかし、ともすれば、「観光」という言葉が『易経』によるというだけですませた

り、観光統計の「定義」の解説だけであつたりする。共著の図書には、観光の本質理解が共有されず、各々がよく知る分野をまとめただけというものもある。観光研究に「哲学」が足りないと感じる研究者は、筆者ばかりではなかろう。本稿は、コロナ以前とは異なるアフターコロナの観光を論じようとするなら、「人はなぜ観光するのか」を真摯に考察することが必要と考え、観光の「本質観取（直観）」を試みようとするものである。しかし、その前に、これまでの観光の本質論がどのようになされ、それが観光学にどのような意義をもっていたのかを、見ておこう。

I 『易経』由来の「観光」論議

本質を探究しようとするとき、その名称がそもそもどのようにつけられたのかから始めることは、多くの場合有益である。名称は「実態」を踏まえてつけられているからである¹。しかし、こと「観光」についてはあてはまらない。

明治以後、西洋文化・文明を取り入れる際、日本には存在しない抽象的概念の多くが漢語を借りて日本語に翻訳された。社会、個人、近代、美、恋愛、存在、自然、権利、自由などがそれである²。そのおかげで最先端の学問を日本語だけで相当程度学ぶことができることとなり、今に至っている³。残念ながら、観光学はその恩恵に与ることができなかった。

「観光」は、英語の *tourism*、または同語源のヨーロッパ語の翻訳語として選ばれた。その由来は『易経』の「観国之光。利用賓于王。(国の光を観る。もって王に賓(ひん)たるに利(よ)ろし。)」にあるとされる⁴。しかし、『易経』で用いられているこの言葉の意味と、われわれが研究対象としている観光現象との関係を論じているものは、管見の限りでほとんどない⁵。例外のひとつが島川崇の解説である。そこでは以下のような説明がされている。

島川は、『リーダーの易経』など多数の易経関連書がある竹村亜希子の解説を手掛かりとする⁶。天下を治めるリーダーの成長には6段階あり、第2段階の「人生の師となる

1 『荀子』には、「実を異にする者をして名を異にせざること莫からしむ(実際の対象事物が違っていればすべて必ず名称も違える)」とある(金谷[8] 166ページ)。

2 詳しくは、柳父[27]を参照されたい。

3 ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英は、日本人がノーベル賞を取れるのは日本語で最先端のところまで勉強できるからではないか、という説を論じていた(2014年11月26日付『朝日新聞』「耕論」)。

4 高田・後藤[21], 206-207ページ。

5 また、観光を易経から論じている研究者の文献で、この言葉が『易経』のどこにあるのか出所ページを示しているものも見たことがない。

6 竹村亜希子は易経をリーダーの資質や能力を陶冶する視点から読み解こうとしており、実際、古来為政者の必読本として読まれてきたのであるから、そうした読解は的を射ていると思われる。なにより、素養のない筆者には『易経』本文を読んでもほとんど理解できず、竹村の解説書はたいへんありがたいものである。

大人と現場で出会い、その人となりを見て学ぶ」というのは「国の光を観る。もって王に賓たるに利ろし。」に通じる、とする。「観国之光」の一節が登場するのは第4段階においてであり、「リーダーとして必要な素養の一つである洞察力を身に着けた完成形の一步手前」の段階の内容を意味している、とする。また、「観」はたんに観るだけでなく、能動的に観す（示す）とも、受動的に観られるとも読み下され、「旅に行くことと、旅人を迎えることの両面であることが、ここからも明らかになっている」とする。さらに、「観る」はたんに「見る」だけではなく、目に見えないものを洞察するのであり、観光も「ただ目の前のものの形や色等の表面を見るのではなく、その背景やたどってきた道、それを守ってきた人々の想いまで、想像力を駆使して考えるのが、観光のあるべき姿である」と論じる⁷。

この説明からは鳥川の観光に対する思いや、こうあるべきと考える姿が良く伝わってくる。だがそれは、われわれの眼前にある研究対象としての観光＝ツーリズムとは違う。易経は古来為政者の必読本として読まれてきたものであり、リーダーの成長論として読むことに違和感はない。しかし、リーダーの「観光」と一般人の観光は異なる⁸。もっとも広くかつ形式的な（それだけに内容に乏しい）観光の定義は「楽しみのための旅行」であろうが、観光研究者がまず解明すべき対象はこれであろう⁹。リーダーが成長のために行う「観光」ではない。

鳥川の観光解釈の意図は、多分に「表面的な入込客数や経済効果だけで観光を語ることの小ささ」を批判し、そうであってはならないという反省から観光の今後を論じたいというところにあると思われる¹⁰。意図は理解できる。だがそれは観光の志やビジョンではあっても、一般人が行っている現実の観光ではない。現実の観光をビジョンに向かわせるにはどうすれば良いか、その探求こそ課題であろう。観光をいきなり易経から説こうとすると道をそれかねない。

小林寛則『人はなぜ観光するの？』は、子ども向けの図書であって学術書ではない¹¹。しかし、子ども向けだからこそ、わかりやすく本質を的確にとらえねばならない。しかし、残念ながら書名にふさわしい答えはどこにもない。観光は『易経』に由来しているという説明とともに、幕末の軍艦に「観光丸」という名前をつけた不思議さが付加され

7 鳥川 [10], 4~7 ページ。

8 リーダーの観光に近いのは「グランドツアー」かもしれない。詳しくは、岡田 [19] 参照。もっとも、アダム・スミスはこれを「ばかげた慣行」と呼び、こんなことが流行るのは「大学が悪評に身をゆだねたため」と言っている（『国富論』第五編第一章）。現実にはあまり効果はなかったようだ。

9 白幡洋三郎は、苦しくつらい「旅」が楽しい「旅行」になったのは、「移動に際しての無用な苦労や危険が取り除かれて」以来、つまりは交通機関の発達や交通網の充実、宿泊設備・宿泊業の隆盛があつてこそ、と説いていた（白幡 [12], 6 ページ）。現代は、それが現実となって今や爛熟し、「その先」をこそ考えねばならないのだが、それは最後に論じたい。

10 鳥川 [10], 8 ページ。

11 小林 [9]。

ている。観光とは何か、実はよくわからないと表明しているかのようである。上田卓爾は、その観光丸の命名の由来を探っている。結局、だれがどのような趣旨で命名したのかは審らかではないが、江戸時代に観光は「観光は天子の耿光（さかんな徳）を観ること」といった意味ですでに使われていたという。さらに言えば、観光という言葉自体は15世紀の文献にまで用例をさかのぼることができる、という¹²。つまり、用例を採れば採るほどそれらすべてに共通する本質的特徴を探ることは虚しくなるのである。観光学が基本的に19世紀以後の大衆観光＝ツーリズムを研究するのであれば、命名の由来から観光を論じることはもうやめた方がよい。

II ジョン・アーリ『観光のまなざし』登場の意味

観光の本質論の必要性を感じていた人々を喜ばせたのがジョン・アーリの『観光のまなざし』であった（1990年原著出版、1995年邦訳出版）。アーリは、ミシェル・フーコーの「まなざし」概念を援用し、人々が観光に出かけた際に周囲に向けるまなざしは「社会的に構造化され組織化されて」いると同時に、社会や社会集団、時代が異なればそれとともに多様に変化するものであると論じた¹³。また、そのまなざしは、「どんな時代のまなざしもその反対概念との関係性から、つまり社会体験とか社会意識の非観光形態との関係性から構成されていくもの」であるから、「観光のまなざしの一つ一つは何と対照しているのかによって決まる」という。それゆえ、観光を研究するにはたんに観光実践そのものを見ているだけでは十分ではなく、「社会の中にある非観光的社会行為との対比、とりわけ家庭と賃労働の中に見られる慣行との対比¹⁴」を見ることが重要であると、海浜リゾートの棲み分けや盛衰がまなざしのあり方やその変容とどのように関わっているかを、鮮やかに実証してみせた。アーリは、観光の本質を踏まえた研究方法とその有効性を示したのである。

アーリが依拠したフーコーは、それぞれの時代には特有な知の枠組み（エピステーメ）があり、各時代における個人の考え方や行為は、このエピステーメに規定されると説いた哲学者である。もともと人間の認識自体がなんらかの「枠組み」、つまりカテゴリーを不可欠のものとしていることは、イマニュエル・カントが明らかにしていた¹⁵。このカテゴリー抜きでは人間の経験は成立しない¹⁶。フーコーは、社会事象を見る目

12 上田 [24], 38 ページおよび 45 ページ。

13 アーリ [25], 2 ページ。

14 同書, 3 ページ。

15 カント [7], 172 ページ。

16 『純粋理性批判』におけるカントのカテゴリー論を簡単に紹介すると、カテゴリーとは知性（悟性）が直観の対象という素材に適用して、その対象の「何であるか」を概念的に判断する枠組みである。それには分量・性質・関係・様相の4カテゴリーがあり、その各々が3つに分けられて計12のカテゴリー

にも特定の枠組みがあるとし、それを「まなざし」と呼んだのであった。認識カテゴリーは類的存在として人間に備わっているものであるが、まなざしはそれとは違い、社会的存在として人間に備わるものである。したがってその枠組みは、時代が違い、社会が違い、社会集団が違えば変わる。アーリは、観光客の見る目にもまた特定の観光のまなざしがあり、それ抜きでは観光の経験は成り立たないと主張したのである。「観光のまなざし」論は、まなざしを形成し、次いでまた変容させる、観光客と観光対象の間にある社会構造の考察によって観光を論じる道筋を開いた。¹⁷

フーコーのまなざし論の援用が観光学にとって大きな武器となった理由は、フーコーが「知に確実無比の根拠だけを求める態度を相対化し、知の営みを、たえず他の誰かによって別の仕方でもやり直される、ひとつの可能性として示して見せ」る学問的方法をとっていたことにもある。¹⁸新しい学問分野である観光学にとって、事実と他の事実との間の因果関係をもとに法則的理解を求める「科学的方法」が扱える対象はあまり大きくはない。それとは異なる“意味の連関”を求める方法が中心になる。しかし、その場合の問題は「説得力」である。事実の連関の場合は、たいていは実験・検証してみれば真偽がわかる。しかし、意味の連関の場合、何とでも言えるソフィスト流の詭弁と見られる危険性を持つ。だからこそ意味の連関の解釈は広く共有されている直観によって支えられていることが必要になるが、新しい学問分野の場合、そうした状況が十分にあるとは言いがたい。¹⁹さまざまな知の営みを試み、相互にぶつけあうしかないのだが、バラバラに言い合うだけでは研究の方向性は見出し難い。「まなざし」論は、多様な研究対象を多様なままに考察しつつ、相互に比較する可能性を示したのである。と同時に、解釈次第で別の見方の提示もありうる「開かれた研究方法」として歓迎された。

広く受け入れられた観光のまなざし論であったが、概念の曖昧さについては早くから批判があった。安村克己はその一人である。安村は、『観光のまなざし』自体は観光の本質を探る理論研究において「もっとも重要な文献のひとつ」と評価しつつ、そのまなざし概念が「理論的探究の構成概念として十分に鍛えられていない」ため、考察の不徹

一となる。「因果性」は関係のカテゴリー中の一つのカテゴリーであり、因果関係を把握しようとする人の知性に備わる機能である。因果関係は事物と事物のあいだに最初からあるのではなく、知性が因果性カテゴリーの中で対象を把握するがゆえに成立する。われわれはその経験から学ぶことで、次の事象の予測を可能にする。アーリの着想は、観光対象も最初から対象として存在するのではなく、いわば「観光カテゴリー」の中でとらえられてはじめて観光対象になるというものではなかろうか。

17 岡田温司は、ポンペイの発掘によってそれまで見向きもされなかった廃墟にもにわかに人々の関心が集まりはじめたという例をあげ、「この種の『発見』は、私たちの日常でもしばしば起こる……何かの拍子にそれが大きな意味をもちはじめてくる」という（岡田 [19], 130-131 ページ）。ただ、当時はまだそれはグランドツアーを行える上流階級だけの関心であったが、今ではそれが広く一般的な関心になっているのである。京都人には伊藤若冲が「発見」されたのはそれほど昔のことではない、といえは良いであろう。

18 内田 [23], 17 ページ。

19 ゼノンの詭弁は、そんなこと（“アキレスは亀に追いつけない”など）はありえないという直観があるゆえに、「詭弁」として成り立つ。直観がなければ真偽が不明なだけでなく、胡散臭い説となる。

底を招いていると批判した。そこから安村は、フーコーのまなざし概念が展開されている医学的まなざしの構造を解明し、観光のまなざしの「再構築」を²⁰図ろうとしている。

安村の再構築の評価は注記に譲るが、アーリ自身も同様の諸批判を踏まえ、『観光のまなざし』第3版でフーコーのまなざし概念を深めて自説を補強しようとしている。²¹しかし、必ずしも十分ではない。だが、言わんとするところは理解できる。すなわち、「まなざしというのは、目に世界を映すというより、世界を整序し、形づくり、分類する行為」であると言うのである。そして最後に、次の引用文で結論づける。「世界は自明なものとしてあるのではなく、『そのままの目』が『外の世界を見れば』自然に『見えて』くるようなものではない。……見えるということは、人が学びとった文化的慣習でしかない²²」。フーコー解釈として妥当かどうかはともかく、「まなざし」についての説明自体はわかりやすい。本書の訳者である加太宏邦は「訳者あとがき」で、まなざし論はこの意味でだけフーコーを援用している²³のであり、フーコー解釈から「観光のまなざし」批判を行うのは筋違いである、と述べている。筆者も同感である。観光は、観光資源だけを見ていても理解できず、それを見る観光客自身にもまた目を向けねばならない、ということであろう。

『観光のまなざし』以後、時に、同種の外延的な研究が増えたと批判的に評されることはあるが、観光研究が活性化したことは疑いない。アーリは多様な観光研究を総合する視点を観光学に与え、観光の本質とは何かを論じる足がかりを提供した。

Ⅲ 東浩紀の「観光客」論

東浩紀は、在野の哲学者・批評家としては知られていても、観光を研究しているとは

20 安村 [28]。その理論展開は以下の通りである。フーコーの医学的まなざし構造では「主体=医師——客体=病人」であり、そのまなざしが社会的組織的に構成される規準が「真理」というエピステーメ（知の枠組み）となっている。しかし、アーリの観光まなざし論には医師に相当する観光専門家は存在せず、「主体=観光客——客体=観光対象」となり、まなざしを構成する規準も明示されていない。そこで安村の「新・観光まなざし論」では、「主体=観光専門家——客体=観光対象」とし、まなざしを構成する規準を「正当性」とする（同書、19-20ページ）。「観光専門家のまなざしが、時代の実践的な[時代の価値]“正当性”をもつ知のまなざし」であり、それは現代では「サステイナブル・ツーリズムのまなざし」である（同書、21ページ）、というのである。

形式論理的な説明としてわからなくはない。「正当性」についてはもっと説明が欲しいが、注記で「説明を要する概念」としつつ紙幅の都合で詳述されていない。いずれにせよ「新・観光まなざし論」を用いた具体的論述を読まないことにはその評価は難しい。ここでは、形式的な疑問のみ表明しておく。周知の通りフーコーは、ゲイを性的な機能障害と規定するような医学の「真理」を疑わしいものと見ていた。とすると、ここでの専門家のまなざしである「正当性」も同様となり、「サステイナブル・ツーリズム」も斜に構えて見る必要があるということになるのだろうか。当たっているような気がするが……。

21 アーリ=ラーソン [26]、2ページ。

22 同書、3ページ。傍点はアーリによる。

23 同書、376ページ。

思われてこなかった。観光研究者が東を注目するようになったのは最近のことであり、東 [2] や東 [3] に関わるダークツーリズムを実践する一風変わった哲学者だった。しかし、東が2017年に出版した『ゲンロン0 観光客の哲学』は、多くの観光研究者にとっては驚くべき作品であったろう。そこでは、アーリの『観光のまなざし』も含めて多数の観光研究が使われ、観光や観光客について考察されている。それゆえ観光の研究書であることは確かである。しかし、観光学の問題意識や課題意識とは連続していない。したがって、「それをどう評価すべきかよくわからない」という戸惑いが観光研究者にはあると思われる。

管見の限り、観光研究者で本書を取り上げているのは、舛谷鋭と安村克己くらいである。安村 [29] は副題に「『観光客』概念の批判的基礎論を手がかりとして」とあり、「観光客の哲学」と銘打つ本書を本格的に論じていても良さそうだが、取り上げているのはマキャネルのそれであり、本書には注記で触れるに止まっている。それに対して舛谷 [15] は本書の書評であり、「本書が観光研究者にとって、観光現象を明晰に説明し、観光客の思想的な可能性について強い発信力を持って出版されたことの意義は大きい」と高く評価する²⁴。ただし、あくまで従来の観光研究の延長線上での“まっとうな”評価が中心であり、本書自体の課題意識、「オルタナティブな政治思想を考えること……政治と呼ばれない政治の領域を必然的に生み出す現代世界の構造を明らかにし、その非政治的な政治がつくりだす公共や普遍の可能性、つまり観光客の哲学について語り²⁵たい」については、部分的にしか論じていない。ただし、そこに重要な指摘があることは後述する。

東が課題としたのは、政治主体としての観光客概念の創出であった。市民革命にあつては「市民」、社会主義革命では「労働者階級」、ネグリ=ハートの『帝国』の議論では「マルチチュード」といった変革主体概念の議論の延長線上に、それらに取って代わりうる概念として「観光客」を位置づけることができるかどうか、それが問題であった。

東の説明によると、人々は家族の愛ではなく言語や貨幣を媒介にして交流する市民社会に入って市民になり、社会の分裂を統合する契機として現れる国家を通じて国民になる。「政治とはその国家を存続させる²⁶営み」なのであるが、「カントたちは、個人が国民になり、そこで終わりだとは考え²⁷ず、「永遠平和（カント）や世界精神（ヘーゲル）」へと続く発展の「弁証法」を構想していた。しかし、グローバリゼーションの結果、今や国民国家は経済と文化を国家のもとで統合できず、そのパラダイムは崩壊している²⁸。

24 舛谷 [15], 140 ページ。

25 東 [5], 116-117 ページ。

26 同書, 92 ページ。

27 同書, 132 ページ。

28 「リベラルはまだその発展図式（弁証法）を信じている。それにたいしてコミュニタリアンはもう信 /

ネグリ=ハートの「マルチチュード」は、「国民国家の体制」と関わらない「帝国の体制」において登場する政治主体のことである。それは、市民が市民社会の層にとどまったまま、国家を介さず直接世界政治に関わろうとする。しかし、マルチチュードが現実には政治をどう動かすかという戦略論はなく、「ネットと愛さえ信じていればあとは生政治の自己組織化でなんとかなる——かくも都合のいい運動論はそうそう存在しない」「ロマン主義的な自己満足」と酷評される²⁹。

「観光客」概念は、その弱点を踏まえて創出される。けれども、そもそも観光客は政治にさほどの関心をもっていない。自己の欲望に忠実で、見たいものを見、食べたいものを食べ、言いたいことを無責任に語る。そんな観光客は、グローバリズムが可能にする快樂と幸福のユートピアを享受し尽くそうとしている存在の典型であるといえる。そうした人間類型は、これまでの人文学が否定してきた人間ならざる人間、「20世紀の人文思想全体の敵」なのである³⁰。その観光客が、どうして政治主体になるのだろうか。「匿名で、動物的な欲求に忠実で、だれの友にもだれの敵にもならず、ふわふわと国家間を移動する観光客、そんな彼らが可能の可能性を開くとすれば、その公共性はどのようなものでありうるか³¹」、それが本書の問いなのだ。

「誤配」によって、それが東の答えである。

東によれば、観光客とは、帝国の体制と国民国家の体制のあいだを往復し、私的な生の実感を私的なまま公的な政治につなげる存在の名称であり、マルチチュードの概念に近い。そこから、「観光客を『郵便的』な『マルチチュード』と名指す³²」。ここで言う「郵便的」が誤配を意味しており、予期しないコミュニケーションの可能性を多く含む状態とされる。

観光の本質が情報の誤配にあること、そしてその誤配がある種の啓蒙に通じていること……観光客が観光対象について正しく理解するなど、まず期待できない。しかしそれでも、その「誤配」こそがまた新たな理解やコミュニケーションにつながったりする。それが観光の魅力なのである。……観光客=郵便的マルチチュードのコミュニケーションは、……偶然に開かれている。観光客は、連帯はしないが、その

ㄨ じない」という指摘は興味深く、肯ける。リバタリアニズムは、「そのパラダイムを超える理論の可能性を宿している」が「リバタリアンには動物の快樂しかな」い。しかし、他方の「コミュニタリアンには共同体の善しかな」。そこから東は、「このままではどこにも普遍も他者も現れない。それが今直面している思想的な困難である」と論じる（同書、132-133ページ）。筆者はこれが考えるべき課題であることには賛同しつつ、性急に結論付けることは控え、今少し考えてみたいと思う。

29 同書、146ページ。

30 同書、112ページ。かつて、ある経済学者が経済学モデルの「合理的経済人」を「内蔵をむき出しにした異様な人間」と評したが、これに近いかもしれない。

31 同書、116ページ。

32 同書、158ページ。

ワークに参入するようになって「優先的選択」が発生すれば、確率的に生じていたはずの選択が、「もはや、匿名の消費者が著名な生産者に集中させる一方的な財の移転、あるいは無名の新人が古参の有名人に向ける一方的選好の表現に変わった」ということになる。³⁸ 東によれば、これも「誤配」なのである。人々は格差の拡大や不平等を広げようとしていたわけではないからである。

この現状を変革するための戦略が「再誤配の戦略」なのである。

誤配をスケールフリーの秩序から奪い返すこと、それこそが抵抗の基礎だ……誤配を演じなおすことを企てる。出会うはずのない人に会い、行くはずのないところに行き、考えるはずのないことを考え、帝国の体制に再び偶然を導き入れ、集中した枝をもう一度つなぎかえ、優先的選択を誤配へとさし戻すことを企てる。³⁹

これを東は「観光客の原理」と名づける。

そうした観光客概念の可能性について、観光研究者は正直なところ面食らっている。よく言えば、観光学のパースペクティブをそれまで考えもしなかったような高みへと引き上げたのであるが、観光研究の課題意識の連続性と切断されているため「こんなものは観光学ではない」とも言える。先に挙げた舛谷鋭の書評は、まだ好意的な取り上げ方かもしれない。その舛谷も、『『弱いつながり』によって脱出あるいは社会システムの再構築を図ることは説得力を欠く』と否定的に論評している。というのも、現代の観光学が、「選択と排除の構造（麻薬作用）」と「出会いと発見というアイデンティティ効果（覚醒作用）」の両軸を見据えて考察されているのに、本書はもっぱら後者のみを強調しているため、主観的・楽観的に見えてしまうからである。⁴⁰⁴¹ 観光研究者の強みが発揮された指摘と言えよう。

筆者の感想もそれに近いが、東が最後にとりあげているルソーの「憐れみ」が気にかかる。ルソーは、理性に先立つ二つの原理として「安寧と自己保存」「同胞の苦しみへの自然な嫌悪」⁴²をあげていた。社会の基礎にはこの二つがある。観光客のような「弱いつながり」でも、その量的な蓄積が質的に転化する契機として、人間に本来備わっているこの憐れみがあるのではないか。「観光客の原理」にその期待をもつことまで、否定

38 東 [5], 188-189 ページ。

39 同書, 192 ページ。

40 舛谷 [15], 139 ページ。

41 同書, 139-140 ページ。

42 ルソー [20], 30-31 ページ。もっとも「憐れみ」論はルソーだけのものではない。同時代人のアダム・スミスは『道徳感情論』で憐れみを他者への共感の根底にあるものとしていたし、古くは孟子が惻隱の心=憐れみを仁の芽生えとしていた。

したくない。⁴³

IV 観光とは何か——観光の本質観取——

1. 観光の本質観取の視点

ここまで観光の本質探求に関わる研究をいくつか見てきた。易経由来の「観光」論議は不適當だが、「観光のまなざし」や「観光客の哲学」には見るべきものがあった。しかし、そもそもなぜ人は観光に行くのだろうか。そこはまだ筆者には鮮明ではない。そこで現象学でいう「本質観取」という方法を用いて考察を試みたい。

本質観取とは、「みずからの体験を反省しつつその『本質』を記述すること」である。⁴⁴ 各人はそれぞれの体験にもとづき、その体験をある視点から眺めたばあい「こうとしかいえない」という感触の核心を取り出す。その結果得られた本質の記述は、相互に確かめ合うことができるものになるのである。⁴⁵

43 とはいえ、観光客の原理によって再誤配が起きても、格差や不平等はなくなるだろう。以前よりマシにはなろうが、平等をめざして再誤配が行われるわけではないからだ。平等をめざすならさらなる工夫がいるだろう。かつて J. S. ミルは、生産システムは変えなくても分配システムを変えれば資本主義の弊害を是正できると主張した。マルクスからは折衷主義と批判されたが、富の分配は人為的制度上の問題と考えたからだ。「ある人が自分自身の個人的な骨折りによって、他人の力を借りることなしに生産したものでさえも、その人は、社会の許可なしにそれを保有することはできない」のである（ミル [17], 14 ページ）。富の偏りがスケールフリーの結果だとしても、それを可能にした社会の許可なしに富を保有し続けることはできない。しかし、今日のグローバリゼーションの世界では、再分配の社会的決定は容易ではない。競って下げてきた法人税率——「底辺への競争」などと言われた——に下限を設定することさえ、困難な国際協調が必要となる。

44 西 [18], 43-44 ページ。

45 この説明でフッサールの本質観取（直観）を説明できたとは思わないが、だからといって原典に依拠した十分な説明が筆者にできるわけでもない。そこで文学者の平易な説明に頼りたい。以下は、笠井潔の『バイバイ、エンジェル』（創元推理文庫、1995）の一節である。

「現象学でいう本質直観には、どこにも神秘的で非合理で謎めいたところ、あるいは人の度肝をぬく奇術のようなところはありません。それは、どんな人間であってもほとんど無自覚のうちに日常的にはたらかせているような、対象を認識するための機構の秘密を明らかにしただけのものです。・・・僕たちは誰でも〈円〉という概念を持っています。三歳の子どもでも、何が円くて何が円くないのかを判別することができるでしょう。けれども、よく考えてみると、これはとても奇妙なことです。円の概念を円周率で定義することができるとしても、僕たちはこの世界にあるすべての円形のもの円周率を計測してみても、円の概念、つまり円の本質を知るようにはなりません。いや、精密に測れば測るほど、本当の円、純粹の円などというものがこの世界に現実には存在しないことを思い知らされるだけでしょう。つまり、さまざまな円形のものについての経験的な比較や実証的な計測をいくら重ねてみたところで、僕たちは決して円周率によって定義される〈円いもの〉の本質には辿り着けないしくみになっているわけです。…しかし、僕たちは、明らかに〈円いもの〉と〈円くないもの〉を判別することができるし、つまりは誰もがすでに円の本質を知っているのです。実際問題として、ただ一つの円さえも測ってみる必要すらなく、すでに円の本質を直観しているのです。／なぜこんなにも奇妙なことが起こるのでしょうか。これについて現象学者は次のように考えます。僕たちが何か円いものを、たとえばここにある一枚の硬貨を眺めるとします。本質直観とは、その一枚の硬貨という見本に、〈円なるもの〉一般の一つの原型という性格を持たせることから始まります。そして次には、硬貨の中にある〈円なるもの〉を無限に多様な無数のかたちに想像の中で変容してみなければなりません。この、想像の中で行われる変更作用によって、円の本質が直観されるようになります。たとえば、円い太陽、円い時計の文字盤、円い煙草の切断面、等々と考えていくわけです。しかし、円い歯車、と調べてみる」

観光と名がつく人間の活動にはいろいろある。大自然を目の当たりにしてみたいといった「自然観光」、人類が何を作ってきたかを見たいという「人文観光」、歴史をひもとく「史跡観光」などなど。ほかにも、躍動する世界の今を見る「都市観光」、農業・林業・漁業の体験ができる「農村・山村・漁村観光」、産業遺産やものづくりの現場にふれる「産業観光」、由緒ある町並みなどを歩く「町並み観光」もある。さらに、「〇〇観光」と呼ばれているわけではなくても、ディズニーランドやUSJなどのテーマパークに行くのも、映画・テレビ・アニメなどで有名になった土地を訪れてみるのも観光だし、スキーや海水浴に行ったり、ハイキングや山登りを楽しんだりすることも、観光と言われる（海浜観光、山岳観光）。行って帰ってくるという旅行（ツアー）の特徴から観光を「ツーリズム」と呼ぶものには、「〇〇観光」と訳せそうなもの（アーバンツーリズム、ルーラルツーリズム、ネイチャーツーリズム、グリーンツーリズム等）以外に、必ずしも適訳があるわけではないエコツーリズム、エスニックツーリズム、ヘルスツーリズム、メディカルツーリズム、フィルムツーリズム、コンテンツツーリズムなどがある。いずれにせよこれらの観光は、人がどのような欲求・関心をもって活動するかという側面を中心として命名されている⁴⁶。

これらに共通しているものを探れば、「観光とは何か」という問題に答えることができるかもしれない。しかし、その共通性を見るにも、特定の視点がある。いっきよに全体をとらえることはできないからだ。視点が異なれば、同じ対象でも異なるものが見えるだろう。本稿では、人間はこれらの観光において何をしたいと思っているのか、という欲求の視点から見ることしよう。はたして人は、「観光をしに行く」といって出かけるとき、いったい何を求めているのか、それを考えたいからである⁴⁷。

ㄨ とき、僕たちはこの像を想像の中から撤回しなければならぬと感じます。歯車は歯が刻まれているからこそ歯車なので、その刻み目の存在が、円い歯車という想像を不可能にしてしまうのです。このようにして僕たちは、想像中で行われる無数の変更作用の結果、一枚の硬貨から出発して〈円いもの〉と〈円くないもの〉を判別しようとする一般的な基準、つまりは円の本質に達することになります（146-150ページ）。

46 他に、観光の場所を指したり（京都観光、バリ観光、南極観光など）、その形式や性格をとらえたり（近代観光、セックス観光、マスツーリズム、サステナブルツーリズムなど）、社会的な意義や目的に焦点をあてたり（オールタナティブツーリズム、ソーシャルツーリズム、ダークツーリズムなど）する等々の呼び方もある。

47 観光をビジネスの視点から見ようとする場合、つまり人が観光行動をすることによってどのような商品・サービスが求められるかを考えるような場合、「観光とは何か」は、当然、異なって見えてくるであろう。そこでは人の欲求総体を必ずしも見る必要はなく、観光における購買活動に関わる限りで目に映じてくる欲求をとらえることになる。それもまた、いささか視野が狭くなるかもしれないが、特定の視点から見た「観光とは何か」への回答に違いはない。むしろ、焦点が定まっている分だけ、よりクリアな像を結ぶかも知れない。いずれにせよ、複雑な事象の総体をいきなり把握することは無理な話である。様々な視点からの像を持ち寄って検討することが必要なのである。

2. 楽しみのための旅行

第一に、誰もがすぐ気がつくことは、これらはみな非日常的な楽しみの経験として欲求され、行われているということである。日常では体験できない自然や文化、都市や農村、レジャーやスポーツ等々を楽しもうと出かける。とってそれは、けっして本格的に取り組んだり学んだりしようというのではなく、ほんのすこしばかりの楽しみを求めての活動である。つらい修業の旅や、死をも覚悟するような探検とは、およそ異なる。その楽しみは、飲んだり食べたり、歩いたり走り回ったり、お風呂につかったりといった生理的・身体的な欲求に限られない。雄大な自然や優れた作品に感動したり、美しさにうっとりしたり、知的興奮を味わったりといった文化的・精神的な欲求も含まれる。

同時にそれは、少し離れた場所で行うという要素も含んでいる。人々は、日常生活圏では得られない、よその土地へ行かねば得られない楽しみを求めている。日常的な楽しみだけでは飽きたらず、異なる種類の楽しみを追いかけて距離を克服しようとする、ということだ。仮に、日々の生活から離れて上記のような諸活動をするとしても、それが日常性を感じられる場所で行われるなら、人は観光活動をしているとは感じない⁴⁸。都市観光や農村観光は、今、住んでいる都市や農村を見るのではなく、寺社観光も通勤・通学途上の神社仏閣に立ち寄ってみる、ということでもない。非日常的な活動とはいえ「いつもとちょっと違ったことをしている」程度に感じるのでは、まだ観光ではない。明確に「観光をしている」と感じるには、日常的な場所から離れたところでそれを行うことが不可欠のように思われる。近所のテニスコートやエステサロンに行くのは日常的行為だが、旅先でテニスやエステをするのは観光的行為となる。それゆえ、比較的近くのテーマパークなどに行く場合、そこがはっきり日常生活圏と隔絶している空間と体感されなければ、ゲームセンター同様の普段の「遊び」となってしまう、観光の意識をもつことはなかろう。

目的とする非日常的な活動を、日常生活圏以外の場所で行う、これが観光の第一の共通性と思われる。これはいわゆる、「観光とは、楽しみのための旅行である」というよく使われる定義の内容をなすものであろう。

3. 観光の非日常性の特徴

非日常性といって連想されるのは、「ハレとケ」の理論である。日常生活は「ケ」の世界であり、それが時に冠婚葬祭などの「ハレ」の非日常的出来事によって打ち破られる。日常生活の単調さを打ち破り、日頃の規範の多少なりとももの混乱をもたらすもの

48 「いや、自分はそういう場合でも観光しているという意識がある」という人もいるかも知れない。しかし、その場合、主観的にそうであることが客観的にも認められるかどうかとは明らかに異なる。添乗員の活動を観光とは言わないように、こうした行為も傍目には観光とは認められないだろう。

がハレである。それによって人々は日頃の鬱屈した精神状態から、いつとき、解放される。しかし、そのハレの日は長く続かず、やがてケにもどる。だが、いつときとはいえ解放されたがゆえにたまっていた憤懣はガス抜きされ、またふたたびケの生活に耐えることができる。観光がこの「ハレ」の側面をもっていることは明らかだ。したがって、できるだけ非日常を感じられるよう行動することが主目的となる。

しかし観光は、ともに非日常的出来事とはいえ冠婚葬祭などとは大きく異なっている。なにより、冠婚葬祭は社会的な出来事であり、個人が自由にその時期や内容を選ぶことはできない。それに対して観光は、基本的には個人的に行われるものであり、「観光したい」という個人の思いに端を発し、ある程度自由にその時期・内容・対象を選ぶことができる。もちろん、その自由度は時代や地域によって異なるが、「観光」という名目であれば社会は一定範囲内で人々に非日常を個人的に作り出すことを認めてきた⁴⁹。今日の観光では、「どこで」「何を」「いつ」見るのか、人々はある程度自由にコーディネートできる。「個人的に演出（選択）可能な非日常」、これが観光の第二の共通性のように思われる。⁵⁰

4. 観光の意味の反転・拡張

こうした性格をもつ観光が社会的に広く承認されてくるにつれ、観光の意味が反転、あるいは広がってくる。明確な何かを目的としてどこかへ出かけるのではなく、「観光に行く」ことを口実に日常から脱出しようとする人々が現れてくるためである。そのような人々にとっては「どこで」「何を」は二義的な問題となる。ガイドブックにある観光資源を現地で一瞥しただけでおしまいにするのは、そもそもの目的が必ずしもそれを見ることにあったわけではないことを示している。行ったからには観光資源を見るし、見たいのだけれど、そこからことさらに感動を得ようとしているわけでも、何かを確かめたいわけでもない。ただ写真を撮って「観光をした」という証しが欲しいだけのことであろう。⁵¹ 疲れを癒すという目的で行く湯治も、いつのまにか「温泉観光」と呼ばれるようになった。昔は、湯治以外では他の観光目的のついでやプラス α にすぎなかった温泉宿泊が、いまでは一つの目的のようになったため、社会的な詮索を受けることなく行きやすくなっている。しかも、「温泉観光」と名がつくことで、「全国の温泉地を回りたい」「有名な温泉に入りたい」という新たな欲求＝観光目的も生まれるよう

49 修学旅行などの制度化された観光を除外していることになる。これをどう考えるかは今後の課題としよう。

50 そうした行為が最初から「観光」（あるいは「物見遊山」）と呼ばれていたわけではない。おかげ参りのような「寺社参詣」や「巡礼」、はたまた「修行」や「探検」等々と呼ばれていたことだろう。いずれにせよ、仕事に関わる旅行以外で、社会的に承認・黙認を受けていた旅の形がそれに当たる。

51 「〇〇に行ってきました」などというお土産にもそれが現れている。

にもなった。それは「世界遺産観光」も同じで、「世界遺産巡り」などといった名称をつけられると「世界遺産をいくつ回った」という吹聴も生まれてくる。⁵²

ともあれ、ここで確認しておきたいことは、観光というお墨付きを得ることによって、われわれは社会的に容認される非日常を手軽に得られるようになった、ということである。その結果、ともすれば観光が主目的ではなく日常からの脱出が本来の目的という場合でも、形式的には観光のカテゴリーにくくられるということがあるのである。

さらにまた、観光目的と観光の実態については、表向きと実際の目的とが大きく異なることもある。たとえば、パリ観光がブランド品漁りであったりする。あるいは、寺社参詣が実は悪所通いであったり（「伊勢参り大神宮にもちょっと寄り」の川柳）、かつての東南アジア観光が「セックス観光」などと指弾されたりしたなどは、その悪い方の異なり方の典型例である。⁵³

しかし、そもそも観光の目的が、表面的に現れる観光目的だけであるはずがないのである。自然を見る、人文資源を見る、農村体験をする等々の目的をもって観光に行けば、そこには必ずいつもとは違った出来事があり（トラブルを含む）、いつもとは違った人々との出会いがあり、それによっていつもとは違った感慨や想念をもたざるをえなくなる。そうした非日常との接触が、自分に何かを与えてくれるのではないかという漠然とした期待、人々が観光に出かける目的には、おそらくそれがある。⁵⁴ もちろん、このような期待をもつのは観光に出かける時だけで、日頃はそんな思いを抱いてないと言え、言い過ぎになろう。しかし私たちは、仮にそうした期待をもって暮らしてはいても、忙しい日々がそれを忘れさせてしまう。また、特殊な期待や思いを持ち込むことで平凡な日常が立ちゆかなくなることを恐れている。「平凡な日常」が大事に思われれば思われるほど、ことさらにそうした思いを忘れたふりをしようとする。しかし、観光においてその懸念は小さくなる。たとえそこで何かが起ころうと、それは日常生活とは直接関わりのない異なる場所での出来事であり、日常に影響を与えることなくいつでもリセット可能な経験のように感じられるのである（「旅の恥はかき捨て」）。観光に出かける意識の背後には、日頃の自分を変えたいという思いが「わずかに」あり、それが観光の楽しみのスパイスとなっている。

その「何か」とは何か。それは実は、出かける前にすでに無意識にもっていたもので

52 「日本三景」や「日本三名園」、「日本百名山」などと言うのも同じであろう。また、これまでは観光とは必ずしも縁のない別の趣味をもつ人たちが、その「お気に入り」に登場するとくに変哲のない場所を「聖地」として訪問するのも、そこに行ったことを「語ることができる」というものであろう。

53 良い方の異なり方に「留学」をあげたい。今や単に学ぶだけなら長期にわたって海外に滞在する理由はない。「遊学」が必要と思うのは学者の身勝手ではなく、学問の本質がそこにあるからだ。

54 芸術の世界では、普段見慣れた事物から、その日常性を剥ぎ取り、新たな光を当てることを「異化」と呼ぶ。「習慣化によって蝕まれてしまった生を、このような方法で回復することこそ、芸術の目的」とする説がある（廣野 [13], 92 ページ）。これがどの程度観光にも妥当するかはわからない。ただ、今後の観光の質と方向性に関わるように思われるのだが、本稿ではこれ以上立ち入らない。

はなかろうか。たとえば、「人は信じられると思いたい」、「異なる自分を見出したい」、「今の自分で良いことを確認したい」、「今いる社会を肯定したい (or 否定したい)」、「社会の多様性を見たい」、「多様な中での一様性の貫徹を見たい」等々、様々なものである。それらがはたしてどこから発した思いかといえ、ほかならぬ観光に駆り立てられる人々の日常そのものからでしかない。そこでしか「何か」に対する欲求は生じようがない。日常の中でそうした思いを無意識に抱えた人々が観光に出かけ、日常とは異なる経験をしてその「何か」を得たいと期待している。疲れて旅行から帰って「やっぱり家がいちばん」と漏らすのはそれを確認したかったから、先進国から帰って劣等感を感じ、後進国から帰って優越感を感じるのは、たえず優劣の評価をしながら日々努力している自分を是認したいから、「世界にはいろいろな人間がいる」と感心したのは、そのいろいろな人間に「自分になれない」or「自分もなろう」と確認したからかも知れない。このような非日常は、日常を照らし出す鏡のようなものである。人を観光へと駆り立てる衝動には、自分を取り巻く日常を見つめ直したいという欲求が深部に横たわっているのではないだろうか。人々はそのような非日常を知らず知らずのうちにコーディネートしようとしている。観光とは何かの第三の共通性に、それがあると思われる。

以上を踏まえて、「観光とは何か」をまとめるとこうなる。観光とは、形式的・表面的には「非日常的な楽しみの活動を日常的生活圏以外の場所とする行動」であり、その特徴は「社会的に承認された個人的に演出（選択）可能な非日常」というところにある。その上でかかる行動の背後には、「日常生活の照射という意図をもつ非日常経験の獲得」という隠れた目的がある。ただ、だからといってそれは、けっして日常の破壊を望むものではなく、全体として健全な日常の回復を目的とした活動、なのである。

観光の本質を探究して、ようやく筆者なりの理解を得た。しかし、観光学に画期的な研究の方向性を示したわけでも、世界を変革する概念を提示したわけでもない。長年交通を研究しつつ、なんとなく観光の周辺もウロウロしてきた筆者が、ボンヤリと観光の「底」を見たような気がする、というだけである。ただ、こうしたアプローチの仕方もあるということは示せたように思う。

おわりに

人はさまざまな理由をつけて観光をする。誰もが認める理由もあれば、多少怪しく趣味の延長のような理由もある。ともあれ、観光客には百人百様の観光目的があるのであり、観光資源固有の魅力だけから観光戦略を立てるようでは十分ではない。

オーバーツーリズムに悩まされた京都では、市バスに乗れないという住民の苦情が聞こえてきた。要領良く観光ポイントを回る観光専用路線バスや観光タクシーの活用など

が対策にあげられていた。それにはそれなりの成果もあると思われるが、外国人観光客にとっての観光理由がふつうの住民のふつうの生活を垣間見たいというところにある場合には、効果は限定的となろう。観光戦略にとってその獲得がもっとも重要とされるリピーターになればなるほど、点でなく面を、観光資源でなくその場所全体を楽しもうとするからである。コロナ後も京都の観光需要は維持・増加し続けると見込むなら、市内の公共交通の輸送能力を格段に高める方策が必要であろう。

他方で人口減少に悩む地方都市では、観光によるまちづくりや地域おこしが図られてきた。国も旗を振る交流人口による地域振興の一貫だが、思うにまかせない状況がある。クルーズ船を帰港させても、期待したほどの観光消費は得られなかった。ブームや人任せにせず、地域自体が今ある観光資源を「磨く」、場合によっては「創る」ことの重要性が言われてきた。また、これまでにない観光客誘致方法として「ご当地ゲーム」なども注目されている。観光資源側からではなく、観光客自体の欲求やニーズに目を向けた方策の一つと思われるが、観光が両者あって成り立つものであるからには、この方向の努力はもっとあってよいだろう。

「○○とは何か」という問いは、○○にあたるものが危機にある場合にこそ切実に感じられる⁵⁵。コロナ禍で観光が危機にあることは間違いないが、観光の危機はその前から準備されてきたのかもしれない。しかし、それはまた別の本格的議論を必要とし、本稿を閉じるにあたってはメモ的な付言に止めたい。

観光の危機についてアーリは、U. ベックのリスク社会論と関わらせ、「観光のまなざしの蔓延と、これがもたらす多大な『消費欲動』」への懸念を表明していた。われわれが研究対象とする観光は、注9で示したように、鉄道の登場で移動に際しての無用な苦勞や危険が取り除かれ、つらい「旅」が楽しい「旅行」になって以来のそれである。つまり観光は、「苦痛なき消費」になるにつれ広く享受されるようになってきたのである。そうした苦痛なき消費は、「われわれ生物学的生命の貪欲な性格を変えるのではなく、それを増大させる⁵⁷」。このハンナ・アレントの「苦痛なき消費」論は、消費一般についての議論であるが観光消費も含めてよいだろう。また、「消費がもはや必要物に限定されず、むしろ主に生命の不要物に集中しているということは、この社会の性格を変えるものではなく、逆に、ついには世界のものが、すべて消費と消費による絶滅の脅威にさらされるであろうという重大な危険をはらんでいることを意味する⁵⁸」という指摘は、

55 「国家とは何か」は日本より香港やミャンマーの方が、また、「健康とは何か」は病人こそ痛切に思うことだろう。もっとも、日頃から考えていないとツケが回ってくるのかもしれないが。

56 アーリ＝ラーソン [26], 336 ページ。

57 アレント [1], 193 ページ。

58 同書, 195 ページ。

「不要不急」の観光になおさらよくあてはまるとわれ、バックやアーリの議論に通じる。観光は人類に危険をもたらす、脅威となるのだろうか。この意味で観光の現状を憂い、観光の危機を思うことも、観光の本質についての検討を促している。観光ははたして「動物的生命の不要物」でしかないのか、はたまた「人間的成長の糧」となれるのか。答えはまだない。

【付記】青木真美先生は、年齢こそ筆者よりお若いですが交通研究においては先輩にあたり、交通学会の昼夜で薫陶を受けてきた。研究拠点を関東から関西に移されてからはなおさらであった。退任記念号を出されると伺い、その論考として拙稿が相応しいか迷ったが、京都の観光にも多大な貢献をされてきた先生を思い、書かせていただいた。長年のご厚誼に感謝申し上げますとともに、今後ともご活躍を祈念いたします。

参考文献

- [1] アレント、ハンナ『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年。
- [2] 東浩紀『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』ゲンロン、2013年。
- [3] 東浩紀『福島第一原発観光地化計画』ゲンロン、2013年。
- [4] 東浩紀『弱いつながり：検索ワードを探す旅』幻冬舎、2014年。
- [5] 東浩紀『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン、2017年。
- [6] 遠藤英樹・堀野正人編著『「観光のまなざし」の転回』春風社
- [7] カント、I.『純粹理性批判(2)』中山元訳、光文社古典文庫、2010年。
- [8] 金谷治『荀子(下)』岩波文庫、1962年。
- [9] 小林寛則『人はなぜ観光するの?』ミネルヴァ書房、2020年。
- [10] 島川崇他著『ケースで読み解くデジタル変革時代のツーリズム』ミネルヴァ書房、2020年。
- [11] 島川崇『新しい時代の観光学概論：持続可能な観光振興を目指して』ミネルヴァ書房、2020年。
- [12] 白幡洋三郎『旅行ノススメ』中公新書、1996年。
- [13] 廣野由美子『批評理論入門』中公新書、2005年。
- [14] 増淵敏之他編著『地域は物語で10倍人が集まる』生産性出版、2021年。
- [15] 舩谷鋭「書評 東浩紀(2017)『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン」『立教大学観光学部紀要』第20号、2018年。
- [16] 松尾義之『日本語の科学が世界を変える』筑摩書房、2015年。
- [17] ミル、J. S.『経済学原理 2』岩波文庫、1960年。
- [18] 西研『哲学的思考－フッサール現象学の核心』ちくま学芸文庫、2005年。
- [19] 岡田温司『グランドツアー 18世紀イタリアへの旅』岩波新書、2010年。
- [20] ルソー、J. J.『人間不平等起原論』木田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、1933年。
- [21] 高田真治・後藤基巳『易経 上巻』岩波文庫、1969年。
- [22] 竹村亜希子『リーダーの易経』PHP エディターズグループ、2005年。
- [23] 内田隆三『社会学を学ぶ』ちくま新書、2005年。
- [24] 上田卓爾「観光学における「観光」の歴史的用例について－「観光丸」から「観光」を見直す－」財団法人アジア太平洋観光交流センター『第11回観光に関する学術研究論文 入選論文集』、2005年。
- [25] アーリ、ジョン『観光のまなざし』加太宏邦訳、法政大学出版会、1995年。

59 島川崇が志す「観光」は後者であろう。また、注54に見た芸術における「異化」作用の観光への導入も考慮できよう。

- [26] アーリ, ジョン=ラーソン, ヨーナス『観光のまなざし 増補改訂版』加太宏邦訳, 法政大学出版会, 2014年。
- [27] 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書, 1982年。
- [28] 安村克己「観光の理念的研究をめぐる観光まなざし論の意義と限界」遠藤英樹・堀野正人編著『「観光のまなざし」の転回』春風社, 2004年。
- [29] 安村克己「観光学の科学的認識への問いかけ-「観光客」概念の批判的基礎論を手がかりとして-」『追手門学院大学地域創造学部紀要』第4巻, 2019年。